

ハッサン・バイエフ 人物紹介

2008年1月31日から4月1日までの2ヶ月、「誓い The Oath チェチェンの戦火を生きた一人の医師の物語」(日本語版はアспект刊)の著者として知られる、アメリカ、ボストン在住のチェチェン人外科医、ハッサン・バイエフ医師が、埼玉医科大学総合医療センター形成外科・美容外科診療科で、日本の先進的な医療技術を学ぶため再来日している。週末には、全国各地の、医療関係者、平和人権団体、大学などの招きで講演が計画されている。

「私が『誓い』を執筆した理由は二つあります。戦争は地獄のようなものであり、罪のない多くの人々が犠牲になるということを世界に知らせたかったこと。戦争には、勝者など存在しないのです。そして、私は読者に、チェチェン人というものを知ってほしかったのです」(ハッサン・バイエフ)

2006年11月の初来日から一年あまり、ハッサンは、自らが再び形成外科医として手術台の前に立つこと、複雑な状況を縫って、アメリカとロシア・チェチェンを往復して、荒廃し、立ち遅れたチェチェン国内の医療を改善し、戦争に傷つき、また新たに障害を持って生まれてくる子どもたちを救おうと支援活動を「チェチェンの子どもたち国際委員会(ICCC)」を通じて行っている。今回の各地講演は、こうした、報道されることの少なかったチェチェンの現況を知る好機となるに違いない。

ハッサン・バイエフは、1963年、北コーカサス地方、チェチェンの首都グロズヌイ郊外のアルハン・カラ村に、2卵性双生児として生まれた。彼は双子の兄弟フセインと比べると虚弱児だった。ハッサンは、自身の弱点を克服するために運動競技一特に格闘技に打ち込んだ。彼は、少年時代にソ連では爆発的な人気を博した日本映画「柔道の天才」―黒沢明脚本によるリメイク版で加山雄三主演の「姿三四郎」を観て柔道に魅せられた。70年代の後半には、全ロシア柔道大会でジュニア・チャンピオンに輝く黒帯の柔道家になり、スポーツに力を注いでいたソ連のスポーツ・マスターとして将来を嘱望されていた。

スポーツで成功する一方で、看護師の姉たちと薬草医の父を持つハッサンは、医師になるという夢を持っていた。「ですが、私は学校の成績が悪かったのでそれを堂々と言うことができませんでした。そんなことを言ったら笑われるだろうし、自惚れていると思われるのが解っていたからです」と、彼は回想する。

チェチェン人に対する民族差別は根強く、ハッサンは十分な実力があつたのに、ソ連オリンピック・チームから排除され、また1980年に彼がシベリアのクラスノヤルスク医科大学への入学を志願すると露骨な妨害を受けた。そして仮入学を許可されたものの、最初の半年間、鉄道駅構内の待合室で勉強と寝泊りをしなければならなかった。

1985年に医科大学を卒業し、1988年にチェチェンに戻ったバイエフは、成功した形成外科医となった。ソ連崩壊後は、モスクワに居を移し、美容形成で富みを得た。しかし、エリツィン大統領が1994年に、チェチェンへの侵攻命令を下したとき、ハッサンは美容形成医という儲けのよい仕事を放棄して故郷に戻った。戦争が激しくなると、蓄財の全てを投じて民間戦場医師となった彼は、両陣営から追われるようになる。チェチェン戦士を治療すれば、ロシア軍は彼を反逆者だと非難した。ロシア兵を治療すればイスラム原理主義者たちは彼を裏切り者だと非難した。ヒポクラテスの誓いを堅持することを決意し、ハッサンはロシア兵でもチェチェン戦士でも助けを必要とする者であれば誰であつても治療を施した。しかし、彼が治療した圧倒的多数は、戦争の犠牲者である、ごく一般の非武装の市民たちであった。

第一次チェチェン戦争時(1994－1996)、そして第二次チェチェン戦争の初期(1999－2000)に、ハッサンは、一万数千人の市民を治療した。しかし、同郷の有名な無頼漢で、イスラム主義者を名乗っていたアルビ・バラエフは、ロシア兵を治療したことを理由に、ハッサンを「イスラム法廷」の名で処刑しようとした。一方のロシア軍は、包囲を破って地雷原を突破する中、瀕死の重傷を負った野戦司令官、シャミーリ・バサーエフの右足を切断して命を救ったハッサンに逮捕命令を出した。「100万ドルの賞金がシャミーリの首にかかっていました。彼を見殺しにしていれば、私は今ごろ大金持ちになっていたでしょうね」とハッサンは語る。その緊迫した戦火の下、備蓄が尽きようとする中で、ハッサンと彼のスタッフは、工夫を重ね医療活動を続けようと苦闘した。

バイエフが両陣営から追われていることを知った、「人権のための医師団」が、彼の米国亡命を促した。2000年春に、彼はやむをえず移住し、ニューヨーク・タイムズに以下のように語っている。「私が数千人の市民を救ったことなど誰も思い出そうとくれません。私はただバサーエフの手術をした外科医として記憶されてしまっているのです」

チェチェン戦争は、ロシア側の報道規制で、大規模なテロ事件でも起こらないとマスコミも伝えていないが、人類の歴史上最も悲惨な戦争であり、いまま散発的な戦闘は終息していない。1994年以来、人口100万人と言われたチェチェンでは、10数年間の戦乱で、およそ1/4が死亡したとも言われる。うち、子どもの犠牲者は4万、手足を失った障害児が1万4千、両親を失って孤児となったものが、2万6千と言われる。

米国にあって、ハッサンは、自分の半生を感激的な著書「誓い」に著し、一躍世界に知られるようになった。ヒューマン・ライツ・ウォッチや人権のための医師団、アムネスティ・インターナショナルに表彰され、率直に発言する人権の擁護者として活動している。彼はまた競技スポーツを再開し、2001年と2002年にはサンボ(ロシア式の護身術)の世界チャンピオンになっている。「もしも柔道家としての鍛錬がなければ、私は二度の戦争を生き抜くことはできなかったでしょう」

現在ハッサンは、妻と6人の子どもとともにマサチューセッツ州ボストン近郊に住んでいる。彼の末娘のサツィータは2003年にボストンで生まれた。「彼女は米国で生まれた子どもです。米国の家族もチェチェンの家族も皆喜んでいます。彼女は成長していつか米国の上院議員になるかもしれせん」

しかしハッサンは、米国の友人たちに感謝しつつも、第2の祖国に安住せず、故郷の苦悩を一時も忘れず、チェチェンの国内に残っている人びと、とりわけ子どもたちへの医療支援に奔走している。アメリカの婦人たちが組織した非営利法人「チェチェンの子どもたち国際委員会 (ICC C)」の議長として、チェチェンの小児科病院、聾啞寄宿学校や盲学校への支援を行ってきた。

さらに、2007年にはアメリカの国際医療支援団体「オペレーション・スマイル」の派遣医師訓練を修了して、口唇口蓋裂児童の無料修復手術を担当することで部分的な外科医復帰を果たした。9月にチェチェンに一時帰国した際、20組の母子をハッサン自身が選び、11月南ロシア、アゾフ海沿岸のリゾートタウン、タガンログで実施された「オペレーション・スマイル」の手術ミッションに、貸切バスをしたてて、1000キロ離れたチェチェンから引率し往復、手術を受けさせた。ハッサン自身も手術の一部を担当した。

ハッサンは、ボストン郊外に住んでいるが、ハーバード大学医学部の小児科病院形成外科で学び、今回の埼玉医科大学総合医療センター形成外科美容外科診療科で学ぶにあたってその推薦を受けた。医師免許の規制のゆるい国での活動に十分な経験と技術を認められており、日本滞在の後には、ベトナムでの「オペレーション・スマイル」の手術ミッションに参加を予定し、秋には、チェチェンにアメリカの医療スタッフ26人チームが200人の児童を手術する計画を準備中、その間に南米コロンビアにも派遣される。

埼玉医科大学総合医療センターでハッサンは、2月1日以来、手術室で日本の同僚たちの技を見守っている。「これまでアメリカで見てきたやり方も、かなり違いがあって実に興味深く、刺激されている。こういうチャンスが得られたことに深く感謝している。将来のチェチェン医療の改善に、子どもたちの幸せのためへの貢献には、計り知れないものがある。」と語っている。

「できるだけ近い将来、首都のグローズヌイに小規模ではあっても、独自の、子ども向け形成外科センターを設立したい。問題は資金をどうやって集められるかだけなのだ。建設が実現できたら、アメリカや日本の形成外科医がそこを足場に、チェチェンの子どもたちのために医療活動できたら、どんなに素晴らしいことだろうか？」

二度にわたるハッサンの日本招聘を組織した「ハッサン・バイエフを呼ぶ会」も恒常的な支援組織「チェチェンの子どもたち日本委員会」に発展して、アメリカの組織と手を携えて、ハッサンの夢の実現をささやかながら支えたいと願っている。